

小学3年生における打つことの楽しさを味わうことをねらいとした

ベースボール型体育授業の試み

本田剣紳 (山口大学)

1. 緒言

ベースボール型の先行研究では、守備的局面を重視したものや、ハンドベースボールなどバットを使わないものが多く行われている。しかし、ベースボール型の本来の面白さはバットでボールを遠くに飛ばすことにある。

2. 目的

本研究の目的は、ボールを遠くに飛ばすことに焦点を当てたベースボール型授業の実践により、バッティング動作がどのように変容するか検討することである。

3. 研究方法

小学3年生1クラス30名を対象とし、5時間の授業を実施した。単元中は2つのめあてを中心に、ドリルゲームとメインゲームを行った。2つのめあてについては、体重移動のあるバットスイングを身につけるための「力をチャージしてバットを振ろう!」、地面と並行なスイング軌道を身につけるための「ゴム紐をなぞるようにバットを振ろう!」の2つである。

めあてを意識するためのドリルゲーム(ひも付きティーバッティング)を毎時間実施し、その後メインゲーム(チャージングベースボール)を実施した。メインゲームは、内角60度のコートの中で5対5のゲームを実施した。守備者は4人で、攻撃は5人の打者一巡制とした。バッターは打った後、1点、2点、3点からなる進塁するベースを選んで踏みバッターベースに戻る。守備側はボールを取って、守備側ベースを踏むことにした。得点の判断は、バッターベースに戻るのと、守備側ベースを踏むのとどちらが速いかで決めた。単元前後に技能テストを実施し、飛距離(cm)とスイング動作(3段階)のデータを収集し、単元前後でt検定を実施した。

4. 結果・考察

1) 飛距離とスイング動作の変化について

本研究では、チャージの指導により、大きなテイクバックのあるスイング動作を習得することができた(pre1.66,post2.44,p<0.01)。これは、授業中に児童らが「チャージ」の言葉を使用した場面が多く見られたことから、子どもたちにとって馴染みやすく理解しやすいものであったからだと考えられる。

また全ての児童が、投手側の足を大きく1歩踏み出したスイングを習得することができた(pre2.44,post3.00,p<0.10)。これは、チャージの動作と投手側にステップすることに正の相関関係が見られたことから(0.580,p<0.01)、チャージの動作を習得できたことが影響したと考えられる。

しかし、飛距離とスイング動作全体の変化は見られなかった。スイング動作全体が変化した先行研究では、本研究が5時間であったのに対し、8~10時間と多くの時間を確保していた。このことから、飛距離の向上やスイング動作全体を改善するには、多くの授業時間を確保することが必要であると考えられる。

2) 飛距離の要因について

本研究では、飛距離と打球角度に正の相関が見られた(0.490,p<0.01)。また、打球角度を上げるには、下から上に向かってスイングするのがよいとされ(ロバート・アデア,1996)、本研究の児童らも、下から上に向かってスイングする様子が多く見られた。

しかしながら、動いているボールを打つ場合には、下から上に向かってスイングするのではなく、地面と並行にスイングするのがよい(中井ら,2007)。動くボールを打つというベースボール型のゲームの特性を考えると、静止したボールを打つ時期から、地面と並行なスイング軌道を習得するのがよいと考えられる。

5. 結論

本研究では、大きなテイクバックを取り、ステップしてバットスイングをする動作の習得に有効であった。また、静止したボールを打つ時期から、地面と並行にバットを振るのがよいことが示唆された。

参考文献

- 1) 中井隆司ほか：ベースボール型ゲームでバッティングを学ぶための学習課題とその適時性-「動いているボールを打つ」指導理論による実践の経年次変容分析から-pp163-174,2007
- 2) ロバート・アデア：ベースボールの物理学,pp116-126, 1996